

Title	花伝或問：「世阿弥の芸能稽古論」に関する三つの質疑
Sub Title	The three questions of the learnig-theory of the Noh
Author	中山, 一義(Nakayama, Kazuyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1967
Jtitle	哲學 No.50 (1967. 3) ,p.453- 462
JaLC DOI	
Abstract	In the present thesis we ask three questions of the learning-theory of the Noh. And the answers to them are as follows:- The first question is how the play entertains the spectators. The answer is given by the analogy of flower according to the four-proof-theory of Buddhism. The second question is what the learning of the laws of flower is. There are several problems ; (1) the mind-body-theory of learning, (2) the contents and methods of learning, (3) the learning grades of age through life, (4) three necessary conditions of learning (natural talent, good teacher and love of learning), and (5) the aim and goal of learning. Zeami has given the short and clear answers to each problem. The third question is how the mortal man can learn the eternal art. Zeami has tried to solve the problem through two ways of time and space by the logic of Buddhism.
Notes	第五十集記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000050-0462

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

花 伝 或 問

——「世阿弥の芸能稽古論」に関する三つの質疑——

中 山 一 義

は し が き

去年（昭和四十一年）の六月十八日、小林澄兄先生の喜寿記念論文集が上梓された。三年前に出版の予定であったのが遅れて、ようやく八十歳の誕生日にめでたく間にあった。お祝いにわたしも世阿弥の稽古論に関する論文を寄稿させていただいたところ、このごろになって、三人の方から拙文についていろいろ質問をうけた。一人は国文学者で七十歳に近い老先生、もう一人は能楽師で四十歳のその道のベテラン、三人目は哲学専攻の三十歳の少壮学者である。三人三様の御質疑に対して、お答するのに骨が折れた。御満足がいただけるかどうか。

「一切皆苦」か「一切皆楽」か

或る人問う。世阿弥の「花の理論」の解釈に仏教の「三法印」を応用したあなたの着想には感心しました。わたしも長年国文学を専攻し、世阿弥には特に親しんできましたが、ほかの方とはとにかく、わたしはそれに気付かず、あなたの説明を読んでではじめて、世阿弥が「花と喩え始めし理」と書いた真意がわかったような気がしました。

「何れの花か散らで残るべき。散る故によりて咲く頃あれば珍しきなり。能も住する所なきを、先づ、花と知るべし。住せずして余の風体に移れ

ば、珍しきなり。」(『花伝』第七「別紙口伝」)という条は、まさに、あなたのいう通り「諸行無常」の理に相当します。また、「ただ、花は見る人の心に珍しきが花なり。(中略) されば、花とて別には無きものなり。物数を尽して、工夫を得て、珍しき感を心得るが花なり。」(同上)という条は、あなたの指摘されたように、「諸法無我」の理に相応します。また、「七歳よりこのかた、年来稽古の条々、物真似の品々を、よくよく心中に当てて、わかち覚えて、能を尽し、工夫を極めて後、この花の失せぬ所をば知るべし。」(『花伝書』第五「問答条々」)という条は、たしかに、あなたの云うように、「花の失せぬ所をば知った芸境」を述べたもので、悟りの境地に比すべき「涅槃寂靜」の理に相当するでしょう。ですから、「世阿弥も、「心地諸の種を含む。普き雨に悉く皆萌す。頓に花の情を悟り已れば、菩提の果自ら成ず。」という六祖慧能の偈を「花の段」の最後に附記したのでしょう。

ここまでは、一応、この論文のあなたの趣旨に賛成し、敬意を表します。しかし、賛成すればこそ、この序に、^{ついて}問い質しておきたいことがあります。それは、仏教では、仏理の証印として三法印を説くともいうが、「一切皆苦」を加えて、四法印を説くともいう。このことは、既にあなたは承知されていると思うが、世阿弥の「花の理論」には、「一切皆苦」は適合しないと考える採り上げられなかったのか。もし、また、「一切皆苦」の法印をあらたに加えるならば、それをどう説明されるか。それらについて、是非、あなたのお考えをうかがいたいものである。

答えて曰く。いつもながらの先生の御高配をここに銘じ、御叱正のお言葉をありがたく頂戴いたします。まことに的を射た御質疑で、わたくしの不敏を告白いたします。

「一切皆苦」の法印を加えるべきか、否か、については、御推察の通り、あの論文を書く時迷っておりました。端的に申しますと、答えは既に世阿

弥自身が提出してくれているのでありまして、それは、「花と、面白きと、珍しきと、これ三つは、同じ心なり」という言葉の中に蔵されているのであります。「苦」に照応させて、敢えて「楽」と書き改めて見ますならば、「一切皆楽」という新しい法印が、ここに出来上るのであります。これは芸術的美の世界にふさわしいものであります。あの論文を書くときは、これを採り出す勇氣と勉強とが足りなかつたのであります。

その後美の世界について思索をつづけておりましたら、数年前の夏、突然、若い頃読んだゲーテの寓話が頭に浮んできました。「神よ、あなたは何故美しいものを果敢なくお創りになったのですか」と、人間が尋ねたら、創り主はやさしくさとすように、「いや、わしは果敢ないものを美しく創ったのぢゃ」と云われた。果敢ないものの果敢なさを、素直な眼でながめる時、そこに美を見出す、と西洋の美学は教えています。諸行は無常なるが故に一切は皆苦であり、一切がみな苦であるのは、愛欲あるが故である、と説くのが仏教であり、愛欲を離れば、すなわち、寂滅為楽なり、と教えるのが仏教であります。芸術の世界にも、宗教の世界にも、共通なものが存するかに見えます。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい、住みにくさが高じると、安い所へ引越したくなる。どこへ越しても住みにくい」と悟った時、詩が生れて、画が出来る。」山路を登りながら、こう考えた。「草枕」の主人公は、画家としての自分の立場を「非人情」と呼んでいます。西洋では、カント以来、美は無関心 *interesselos* と考えられ、カント美学の美の無関心性から、更に美的解脱の世界へ進んで行ったショーペンハウエルの如き人もいます。無関心とは一切の意欲的なものからの断絶と超越を意味し、そこでは美は一切の人間苦からの解放の世界を約束すると考えられています。

このように見てきますと、「一切皆苦」ではなく、「一切皆楽」を加えた、四法印を世阿弥の「花の理論」の解釈に当てはめてもよさそうに思え

ます。世阿弥の文脈をよく調べて見ますと、無常なるが故に花は珍しく、また無我（固定したものでない）なるが故に花は珍しい。そうして、珍しいが故に面白いのだ、と説かれています。「花と、面白き、珍しきと、これ三つは、同じ心なり」という公理には、このような秘義が蔵されていたようです。

先生の御叱正に応えるには、不十分だとは存じますが、一応これを以て御返事といたします。近日中にお目にかかって更に御批判をうけたまわりたいと存じます。

花を「知る」ということ

或るひと問う。先生に中学時代英語などを教えていただいたのはもう三十年も昔になります。近頃先生の書かれた世阿弥の稽古論を読んで、昔のよしみで気軽に質問がしたくなりました。わたしも四十の坂を越して、世阿弥の所謂「過し方をも覚え、また、行く先きの手立をも覚る時分なり」という年頃をすでに終ろうとして、心底にいささか落着かぬものを感じています。

世阿弥研究の書は数多くありますが、稽古論とまともに取組んだものは稀れです。ところで先生が、先頃書かれた論文の「知る」ということの意味は、わたしの興味を引きつけました。西尾実先生校訂の岩波文庫本『風姿花伝』の巻末索引には、「知る」という項目はみつかりません。ところが、『花伝書』の中には、「花を知る事の意義」を心得ることがいかに大切であるか、再三くりかえし世阿弥は強調しています。先生も指摘されておられるように、世阿弥の伝書はすべて稽古の書であるといつて過言ではありません。わたしは物心のつくころからこの道に育てられて今日に到っています。それは稽古の連続でありましたが、「花を知ることの^{ことわり}理」など、一度も考えたことはありません、といえは嘘になりますが、考えたことが

あったにしても、それは真剣なものだったとは云いきれません。今齡四十にして、芸能の生涯の半ばに立って過去を省み、将来を望んで、いままでになかったしみじみとした気持で、「花を知る」ということの「理」を、自分の芸能の実際に照して考えて見たい、という心境になっています。世阿弥のいうように、そういう年齢になったのでありましょう。わたしはいまそれを考えてみる気持になっています。わたしのこの念願をかなえさせて下さる一助にも、先生のお考えをお聞かせ下さい。

答えて曰く。釈迦に説法を頼まれたとはこのことです。まったく弱りました。ことわるべきが本当でしょう。しかし、わたしは敢えて説法を引き受けましょう。それには、わたしなりの理由があります。

わたしが長年世阿弥を愛読してきたのは、もともと能が好きだったからではなく、教育思想史研究の上から、世阿弥の伝書に見出す学習の理論に興味をもったからです。もちろん、世阿弥に親しんでいる間に、能が好きになりましたが、わたしの主たる関心は、世阿弥の中にわたしたちの祖先の考えた学習理論の心理や論理の構造が究明できる、ということでありました。

ですから、いまあなたの申し出に応じて述べることも、芸能教育についてわたしのいままで究明してきた一端をお聞かせするので、能の人に能を語る、というつもりはすこしもないものと考えていただきたい。

わたしが『花伝書』をはじめて手にしたのは、昭和二年のことで、もうあれから四十年にもなります。その間、世阿弥の伝書を読む度毎に少しづつわかるような気がしてきました。それは裏返していうと、いつもわからないことがたくさん残っていたということです。現在でも、その点では変わりはありません。したがって、読む度毎に新しい発見をしています。

これから述べることは、芝居のプログラムのすじ書のように、味気ないものでしょう。それはいろいろな事情でやむをえません。云い間違いは聞

き手のそそうということわざ通り、不足や誤りはあなたの方で適当にお役に立つようにおぎなって読んで下さい。生かして読むか、殺して読むかは、あなたの側の責任です。ずいぶんと虫のいい云い分のようなようですが、この点お含み下さい。

まず、「知る」の定義をしておきましょう。それは単なる「概念的知識」ではありません。「種は^{わざ}態、花は心」というように、態は「身」が覚え込むもので、できるだけたくさんの種を「身」に覚え込み、必要な時、いつでも使えるように態に磨きをかけておく。このようにたくさん「身」に覚え込んだうち、どの態を、「いつ」「どこで」「だれに」見せるかはそれは、「心」の働きであって、「花は心」というのはそのことで、この働きを心に養わなければなりません。「知る」というのは、この「身」における「態」の学習と、「心」における「花」の学習との二つを指しているのだ、というべきだと思います。

以上は「知る^{はたらき}作用」の定義ですが、「知っている状態」については、世阿弥は六祖慧能の偈を引いて「菩提果自成」と云い、仏教のさとり境地に喩えています。ですから、後にこの境地を、「得花」の芸境と呼び、「正(証)位」又は「安位」の芸位と名づけ、「正花風」の芸態と称したりしています。

次は、「知るための条件」を採り上げます。世阿弥は『花鏡』「習道智の事」という一節で、芸道修行に不可欠の三つの条件を挙げています。素質とよい指導者と努力との三つがそれです。世阿弥はこの三つが揃わなければ物にならぬと云っています。「物」とは師と許される位であり、揃うというのは、一つでも欠いてはならぬ、ということです。また、素質については、他のところで、稽古によって磨き出されてくるのが素質である、と云っていますが、なかなか含蓄のある言葉であると思います。

次は、「知る順序・次第」ですが、有名な「問答条々」の「花の段」に、「花」には若さや姿形などからくる一時的の花と、生涯失せぬ花とがあっ

て、後者は咲かせることも散らせることもその役者の自由で、これを「まことの花」と呼んでいます。この「まことの花」を知るには、「別紙口伝」にある花の公案によって稽古するがよいが、それには、一定の順序次第がある、とあって、「先づ、七歳より以来、^{このかた}年来^{としごろ}の稽古の条々、物真似の品々を、よくよく心中に当てて、分ち覚えて、能を尽し、工夫を究めて後、この花の失せぬ所をば知るべし」と記しています。「年来稽古」は年令に応じた学習段階の理論であり、「^{ものまね}物学条々」は物真似の品々を数個の類型に分けたものであり、後に二曲三体の基本の理論のもとになったもので、これらは学習内容に関する理論であり、「問答条々」や「別紙口伝」は稽古を行うときの心得や、一種の問題学習の如き意味をもった数々の公案を示しています。例えば「別紙口伝」には、「秘する花を知るべし。秘すれば花なり。秘せずば花なるべからず」「因果の花を知る事、極めなるべし。一切、みな因果なり。」「年々去来の花を忘るべからず。」「舞・働き・物まね、あらゆる事に住せぬ理あり。用心を持つべき事。」「能に十体を心得べき事。」等々、いろいろあります。これらの公案に即して、年令に応じた稽古に工夫を究める、そうしてはじめて、「まことの花の^{ことわり}理を悟る」わけである、そこでは、前にも述べた「身」の学習と、「心」の学習が同時に行われるわけです。

最後に「花の理を悟った境地」について申します。^{わざ}態は上達していても、「花の理を知らない」役者の芸は、面白味に欠けます。態は少しは未熟でも、「花を知っている」役者は、生涯人気を持ちつづけるであろう、と世阿弥は云います。「花を知った」役者の芸風・芸態・芸位には、変化はないかというに、そこにも深まりや高まりなどがある、と世阿弥は見ています。六十歳前後に書いたいくつかの秘伝書には、その理論が見えていますが、それらを一つにまとめたものが「九位」の上三花の理論だ、と思います。また、「器」の理論で、器を空無と見るのもそれでもあります。

仏説では、無常は法（ダルマ）です。花は無常なるが故に、法そのもの

であります。役者が「花を知る」というのは、実は役者が「花に成る」ことだ、世阿弥はそう云っているように、思われてなりません。さうして見ると、舞台の上で演じている名人は、法そのものの象徴だ、ということが出来ます。これが「知る」という言葉の真実義だ、と思います。

一度ゆっくりお目にかかって、あなたのお話もおうかがいしたい、と存じます。以上不満足なものですが、お許し下さい。

時 空 の 問 題

或る人問う。一面識もないわたくしが書翰を以て突然質問を発する無礼をお許し願います。先生の論文を読み、「位」と「器」との理論が、世阿弥の時空観を示すものであるという先生の解釈に大いに共鳴するとともに、更に進んでいろいろ説明していただきたい点もあり、また、先生とはやや異った解釈をもっておりますので、それにつき先生のお考えをうけたまわりたく、敢えて筆を執った次第であります。

第一の世阿弥の時空観については、更に時間の構造、空間の構造に関して、もう一步掘り下げた考えを世阿弥が持っているように思いますので、それをうかがわせていただきたい。

第二のわたくしの異見と申しますのは、「位」と「器」とは、一面において世阿弥の芸能的時空観を示すものであると同時に、時空を超えた芸境を、両者ともに示しているところがありはしないか、という点であります。

若輩の突猪的質疑として、寛容な御解答を願います。

答えて曰く。あなたの御炯眼、恐れ入りました。御質疑の二点、いずれも的を射たものでありまして、数年前わたしが「哲学」第四十三集に発表した「命には終りあり、能には果てあるべからず」——世阿弥の生涯稽古

思想——という論文の中で、わたし自身もあなたと全く同じ二点を追求してみました。その論文の抜刷をお送りしますから、お読みになって更に御高評願います。ですから、詳細はそれにゆずって、ここには一応あなたの御質疑についてのわたしの考えの概要を簡単にお答するにとどめ、論文にもれたであろうことなど、二つ三つ書き添えておきましょう。

『小林澄兄博士喜寿記念論文集』に寄稿した拙文にも書きましたように、「位」と「器」の理論には、世阿弥が考えたさまざまな理論が集約され、総合され、統一されている、と見るべきであるとわたしは思います。わたしは以前に、「位」と「器」の理論を図示しうるなら、「曼荼羅」のようなものが出来るであろう、と考えたことがあります。「位」はさしずめ金剛界曼荼羅に当り、「器」は胎藏界曼荼羅に当ります。

「位」の理論の中には、「序破急」・「苗秀実」・「流離の子」・「初心不可忘」などの時間構造を示す公案が、「器」の理論の中には「二曲三体」・「無主風」・「皮肉骨」・「体用」などの空間構造を示す公案が、隠頭二様にうまく融け込んでいる、とわたしは見ています。

以上は、第一の御質疑に対するわたしの答えですが、詳しくは「哲学」第四十三集の拙文を御覧下さい。

また、第二の御質疑については、右の論文の「命には終りあり、能には果てあるべからず」という表題が示しているように、役者の生命の有限と芸能の世界の無限とが、演能の上で如何に結びつくと考えるか、これが「生涯稽古の理論」の究極の問題である、ということ、その論文で明らかにし、世阿弥がこの問題をどう考えているかを追求して見ました。

「位」における「中三位」の段階や、「器」を「有」と見る場合には、いずれも文字通り「時間と空間との問題」であることははっきりしていますが、「位」における「上三花」の境地や、「器」を「無」と見る場合には、

もはや絶対無限の世界であって、そこにはいわば絶対時間・絶対空間とでも呼ぶべきものが現成しているといわなければなりません。世阿弥は、稽古とか演能とかいう立場から、有限と無限との触れ合いを、このような形で考えていたようであります。

以上が第二の御質疑に対する答えであります。御満足がいただけましたかどうか。いずれ、お目にかかって、お話し合いをしたいと存じます。

あ と が き

昭和のはじめ、予科の学生であった頃、戸川秋骨先生からチャールズ・ラムの「エリヤ随筆」の「ドリーム・チルドレン」を読んでいただいた。それには「夢想」Reverie という副題がついていた。

わたしのこの論文に出てくる三人の人物も、ラムに出てくる二人の子供たちのように、「夢想」にほかならない。わたしの思索の中に現われてきたこれらの人たちは、モデルがないといえば「うそ」になる、あるといっても「うそ」になる。一種の対話の形式をとったのは、自然にそうだったので、企んでそうしたのではない。思索の中途には、このような幻想が、あたかも現実以上に現実的意味をもつことがあるのかもしれない。

(41. 1. 3)